

認知症 必要な支援は？

守山区 金城学院大で講座

認知症の人が住み慣れた地域で生活を続けるために必要な支援や理解とは何かを考える市民講座が12日、守山区大森の金城学院大であった。

県認知症希望大使の土赤伸生さん(63)を講師に招き、県作業療法士会の認定作業療法士伊藤篤史さん(50)との対談形式で進められた。

土赤さんは58歳で若年性アルツハイマー型認知症と診断された。製造業で働いていたが「周囲の助けがあり、働き続けられた。声をかけてくれる人が多く、救われた」と振り返った。

「認知症と聞くと、もう何も覚えられないと思われがちだが、まだ覚えらる。ただ、遅いだけ」とも

認知症になってからの生活を語る土赤さん
＝守山区大森の金城学院大で

語り、スマートフォンのカ

レンダー機能や文書の読み上げ機能でその日の予定などを確認していると説明。

「二つのことを同時にはできない。でも、できることを取り上げないでほしい」と理解を求めた。

同大看護学部3年の花谷柚香さん(20)は「本人のできることに注目し、その人らしさを支えられるような看護師を目指したいと思った」と話した。

市民講座は25～27日に「アジア模擬患者教育者学会」の第1回が同大で開かれるのを前に開催。学会で



は模擬患者を活用した医療教育について各国の有識者らが情報交換などをする。
(篠塚辰徳)